

として位置づけられる木苜峠第24ユニットがあるが、これもある程度使用の場として考えられそうである。

遺物の量そのものは『ユニット』の専有期間の長さあまり関係なさそうであるが、その石材の多様さは期間の長さ、もしくは使用回数の多さに関係あるのではないと思われる。

(4班・空港事務所)

註

1) 『ユニット』は以下の様に分類されている。

A型一石器の種類が豊富で、その文化層に発見される全器種の半数以上を保有し、遺物も多い。これはその行動型が集中的に行なわれたか長期間に亘る継続を示唆する場である。

B型一石器の種類が単純で、発見される全器種の $\frac{1}{2}$ 以下である。これは限られた特定の行動とのみ関連するが、短期間の継続を示唆する場である。

C型一定型的な石器がなく Core とか Flake が卓越するものである。これは石器製作跡であ

り製品が持ち去られた場である。

D型一厨房具の石器が入っているもので、厨房の場である。

E型一石器の種類が単純で Flake, Core などが大量にあるもので、特定器種の石器製作の場である。

F型一石器や Flake などが数点か単独出土のもので、特定の行動に関連するか、特定の行動と係わりをもたない。

2) 例えばこれは1つの石核が剥片剥離作業を行なって終わる間程度の時間を示す。それは季節単位であるかもしれないし、もっと短い時間であるかもしれない。

3) 数個のユニットがある程度密接な関係があると思われるものをグループと呼んでいる。『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』P112

参考文献

『佐倉市星谷津遺跡』昭53

『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』昭50

奈土貝塚出土の土偶

高橋博文

奈土貝塚は利根川の南約6km、現在大須賀川が流れる低地を東側に望む標高40mの台地上に位置し、南西側と北東側には小支谷が入り込んでいる(図1)。本貝塚は昭和32年3月、早稲田大学高等学院歴史研究部により一部が発掘調査され、翌33年3月に報告書が刊行されている。ここで紹介する土偶は昭和55年8月大栄町在住の宝田氏より届けられた資料で、植木の移植作業中に単独出土したとのことである。その後、現地踏査を行ない土器片を多数採集した。

図2-1で示す土偶は、a:右側面と脚の断面、b:正面と腹部の断面、c:背面であり、上半身と左脚部が欠損している。

現存する部分の計測値を示すと、高さ14cm、巾10cm、厚さ4cm、脚部の直径4cm、腰部の巾6cm、腹部の高さ2cmを測り、内部は空洞ではなくかなりの重量感がある。腰が細味の割には下半身が発

達しており、脚も先へ向って細くなることはない。腹部は前に向かって張りだし妊娠している状態を表わしていると考えられる。一番張り出した部分には直径1cm、深さ0.25cmの小さな凹み(「へソ」と

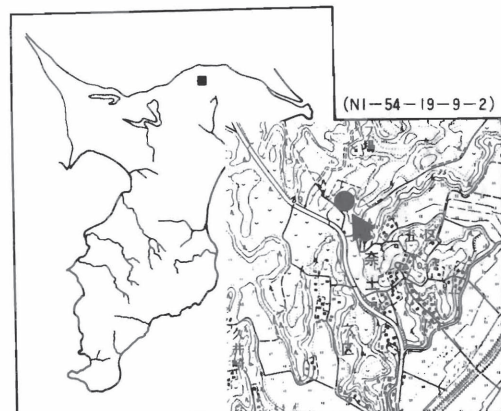


図1 遺跡の立地

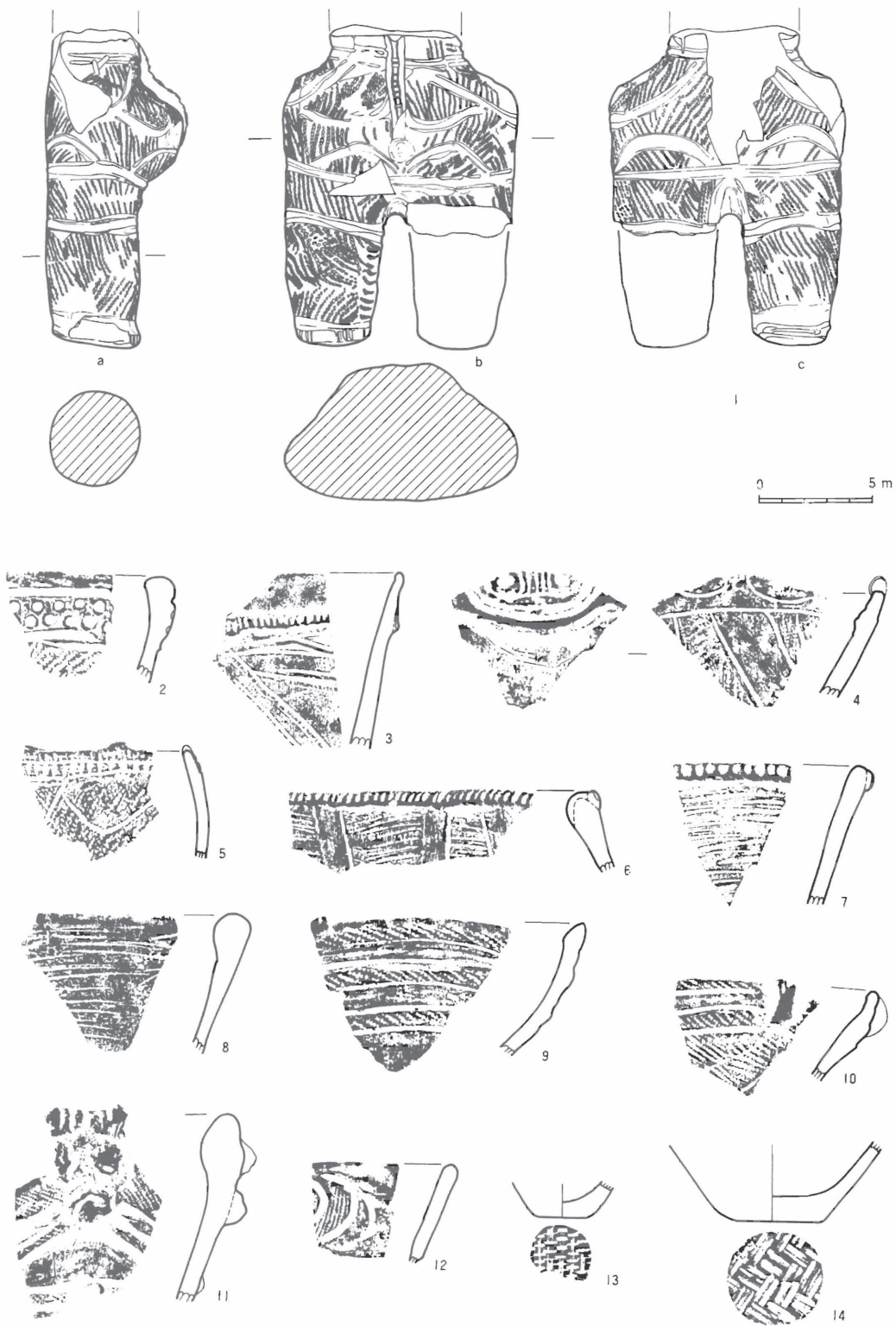


図2 奈土貝塚表採の土偶(1)と土器破片(2~14)

考えられる)がある。次に土偶の表面を飾る文様を見てみる。最初に節の細かい縄文(原体R)を小さな単位ではほぼ全体に施文し、さらにへら様工具で沈線、刻みを加えて文様を描いている。沈線はすべて2本を単位に平行に描かれ、土偶を一周するものと弧状を示すものがあり、前者を描いたのち後者を描いている。また平行沈線の間はさらに磨消しが行なわれ、一部沈線が埋まってしまった部分もある。腰から腹部の張り出しへ向って粘土紐を貼り付け刻みを加えている。脚部の下方の足首と思われる部分は非常に浅い沈線が一周している。さらにその下方には正面より見られる範囲にへら様工具による刻みが加えられている。

今回採集した土器を分類すると加曽利E式(図2-2)、加曽利B式(3~10)、安行式(11)、荒海式と思われる土器(12)とに分かれるが、主体は縄文時代後期中葉の加曽利B式の土器群であり、後葉の安行式土器群が続く。中期の土器は少ないことから奈土貝塚は縄文時代後期中葉以降に営まれたことが知れる。

千葉県内で発見される縄文後期の土偶についてみると、前葉の堀之内期でのハート形土偶や筒形土偶の特徴は胸部は割に扁平で、肩から手にかけて見られる渦巻文、刺突列、沈線文をもつ怒り肩、O脚に開いた脚などが一般的である。中葉の加曽利B式期での山形土偶は三角の頭、T字形の眉毛と鼻、寄り目がそのおもな特徴である。後葉の安行期でのミミズク土偶は、顔はミミズクに似ており、背面に入組文や三叉文をもつのが特徴である。

ここで紹介した土偶は下半身のみで、特徴が見られる上半身を欠いている。そこで全容が知れる他の土偶との比較を試みる。昭和32年の調査で出土したミミズク土偶と比較すると脚の造りやそ

の文様の描きかたに大きな違いが見られ、伴出した土器も安行式が多く、今回と様相を異にしている。またハート形土偶や筒形土偶ともその特徴を異にしている。そこで山形土偶の類例を捜すことにすると、佐倉市吉見台遺跡出土の土偶と非常に類似していることがわかる。現存する部分も全く同じなのである。加曽利貝塚出土の山形土偶の下半身が発達している様子とも類似している。そしてこの山形土偶はミミズク土偶とともに本県でも普遍化した土偶であることが知られている。

奈土貝塚出土の縄文時代後期中葉以降の土器群と、本土偶の特徴から考えると、本県と茨城県にその分布の中心をもつ山形土偶としてよいであろう。また本土偶では腰の部分で割れているが、割れた面は少々磨滅して丸味を帯びているが、全く同様な状態で佐倉市吉見台遺跡から出土している例もあり、今後の資料の増加を望むものである。

最後に、この土偶を発見し、当方に遺物を託された宝田みつさんに謝意を表します。

(6班・東関東事務所)

奈土貝塚所在地：千葉県香取郡大栄町奈土字稲荷前

参考文献

早稲田大学高等学院歴史研究部『千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書』(早稲田大学高等学院史学研究誌第1号)昭33

西村正衛「千葉県香取郡奈土貝塚」『日本考古学年報10』昭38

市立市川博物館『千葉県の土偶』『市立市川博物館図録9』昭45

房総半島における方形・円形周溝について

金 丸 誠

I

近年、千葉県下の内陸部地域を中心に方形乃至は円形に溝が巡り、他に付随する遺構が検出されず、又、出土遺物も総じて希少な遺構の報告例が

増加している(挿図2・3)。従来、方形のものが多い事もあり、それらは方形周溝墓・方形周溝・方形周溝遺構、或は古墳として〇〇号墳という名称で呼ばれてきた。性格については「墓」という